

授業研究：英語の学力 転機の英語教育

山田 隆 敏*

Improving an academic ability through
presentation & critical thinking

Takatoshi Yamada

『大学を取り巻く社会的環境と教養教育の責務』

いまの教育の世界で構造改革を迫られているのは大学である。しかし、教育、研究の両面に通じる「あるべき大学教育」を明確に描くのは容易ではない。また、社会の複雑化と学問の細分化につれて、大学で学ぼうとする学生に、教育の全体像が見えにくいという問題が深刻になってきている。こうした時代に、最も重要なのが教養教育の存在である。教養教育の存在価値についてはこれより総括するが、要点としては、まず第1は世界に発信できる能力の養成のための人材の育成が急務である。さらに第2は複雑化した社会に対応可能な人材の育成と、細分化した学問領域に対応した教養教育の再構築が緊急な課題となっている。

今の世紀を紐解けば、拡散（拡大）と不拡散の闘ぎ合いの世紀であるといってもよいであろう。地球人類の生活基盤活動は地球自体に影響を及ぼし、情報知識活動も爆発的に膨張している。この両者は複雑に絡み合い加速度的に変化する現代社会となっている。こんな混迷した状況下で、人類はその将来的展望を模索しつつも失いつつあるといっても過言でない。激化する地域紛争や深刻な貧困や環境の劣化や資源の枯渇、さらにはASEANやWTOの加盟諸国内での再編化機運など、21世紀を抱える諸問題は不確実な情報知識活動の拡散と不即不離の関連性にあることを否定できない。これらの諸問題はグローバル化の急激な進展と、先進国にあっても少子高齢化や都市化現象によって、地球規模の地域間格差が増大し、貧富の格差が生じる素因にもなっている。

民族・人種・宗教関係の親密化と希薄化の状況と、それに関連する国家間の経済的・宗教的な再構築が生じてくると思われる。この現象を学問的に捉えれば、「人間力の低下」(2006年9月4日の日本経済新聞)に直結すると思われる。

対人関係とか信頼関係によって内生される「人間力・社会人」の育成が、「教養教育」の課題として求められているのである。専門的知識を持ちつつも、専門性に捉われない客観的社会観の涵養が求められているのである。いうなれば社会とニーズを考慮し、幅の広い教養教育を目指して、「教養ある専門家」の養成ではなく、「実学に明るい教養人」(実松、2005)を生み出すための

理想的な教養教育と学習環境の構築が大学教育に求められている。

IT化や知識産業化の進展に伴い、産業界は自ら求める変革課題を積極的に提示し、現在必要とする人材像を具体的に提示する時代を迎えている。人間教育の三原則（知・徳・体）の中で「徳」の心を身につけた人間性の育成が切に求められているのである。例えば、「多様で、個性的、かつ、自立し、主体的に考えることのできる常識人」の育成である。企業が構造・体質・システムを世界のグローバル化に応じて絶え間なく変化させていくことが必要不可欠な時代にあって、幅広く経済の流れを読めて細かく対応できる基盤能力を持った人材の育成（a student with undergraduate literacy）を大学側に求め、大学側も「国際感覚に富む人間力の育成」に真剣に取り組まねばならない時代になっているのである。

必然的に、「学部教育」の「教養ある専門家」育成よりも「教養教育」の「実学面に明るい教養人」育成に、産業界の期待が寄せられている。その理由としては、就職活動の開始時期に注目しなければならない。産業構造の変化とともに、フリーター、アルバイト、NEETなどの“新卒非定職者”が約3割を占める現状の中で、かつてのレベルを大学卒業生に望むべき段階はもはや過去のものとなっている現実がある。そのため、産業界は年々採用の前倒し対策を採用して、できうる限り優秀な学生を確保しようとしている現実を、大学は直視しなければならない。すなわち、3回生の頃の“インターンシップ”制度（3回生の前期）によって、“良質な学生の囲い込み”が実施される。さらには“OB/OGの会社訪問”に始まる「リクルート活動」期間中の間接的な面接によって、“さらなる囲い込み策”が実施される。そして3回生の終わりの2月から4回生の6月末には正式な内定通知が出される。この間、約半年が費やされる。当然ながら、専門性よりも「教養と称される学力」に期待をかけて採用が決定されるのである。この現実、『教養教育の責務』の一端が存在するのである。

『英語を取り巻く社会環境と英語教育の責務』

Questionnaire on High School Students' Attitudes and Life :

The Japan Youth Research Institute is conducting research on the value systems of youth in several countries. The Institute has undertaken research on many youth-related themes such as high school students' paths to the future (in cooperation with the U.S. Department of Education), middle school students' relationships with their mothers, and comparison of grade school students in Japan and the U.S. This study is being conducted in the United States, Japan and China.

All answers are completely anonymous. DO NOT SIGN YOUR NAME TO THIS QUESTIONNAIRE. Your answers and those of other American students will be compared to those of the same age in other countries.

There are no right or wrong answers to any questions, merely mark the answer that best describes your opinion or situation. Circle the number to the right of the answer you choose. You do not have to answer a question if you do not want to.

Questions about yourself:

A. Approximately how are your grades ranked ?

- A-1 English
- A-2 Mathematics
- A-3 Foreign languages
- A-4 All the subjects on average

1 Above average/substantially above average 2. Average 3. Below average

B. At school, when do you feel most satisfied and enjoy yourself? (Please circle all that apply)

- B-1 When I take a class that I like
- B-2 When I engage in student council activities
- B-3 When I am with close friends
- B-4 When a teacher praise me
- B-5 When I get a good grade
- B-6 When I study hard
- B-7 When I do something that suits my special interests or skills
- B-8 When I discover the enjoy of learning
- B-9 Other
- B-10 I don't feel satisfied or enjoy myself at school

<ANALYSIS>

A-1 Mother Language

| | Japan | America | China | Korea |
|---------------|-------|---------|-------|-------|
| Above average | 29.4 | 41.5 | 33.7 | 29.4 |
| Average | 38.4 | 53.4 | 52.3 | 50.7 |
| Below Average | 31.2 | 3.4 | 10.4 | 19.9 |

A-2 Mathematics

| | Japan | America | China | Korea |
|---------------|-------|---------|-------|-------|
| Above average | 24.2 | 41.3 | 27.9 | 25.0 |
| Average | 27.9 | 49.0 | 44.3 | 33.7 |
| Below Average | 44.3 | 7.5 | 23.7 | 41.0 |

A-3 Foreign Language

| | Japan | America | China | Korea |
|---------------|-------|---------|-------|-------|
| Above average | 27.5 | 41.2 | 29.6 | 26.6 |
| Average | 38.0 | 55.2 | 56.8 | 47.2 |
| Below Average | 33.0 | 1.4 | 9.8 | 25.4 |

A-4 All the Subjects on Average

| | Japan | America | China | Korea |
|---------------|-------|---------|-------|-------|
| Above average | 22.2 | 34.1 | 31.5 | 28.3 |
| Average | 34.2 | 50.6 | 42.3 | 40.5 |
| Below Average | 41.9 | 9.4 | 22.2 | 30.7 |

< 分析の講評 >

1996年の中教審の答申による「ゆとりと生きる力の教育」を受けて、2002年に学習指導要領の改訂が実施されるとともに、遠山文科相による「学びのすすめプラン」が“学力低下を防止する施策”のひとつとして出された。これは『第5期学力問題』（2002年7月22日、朝日新聞）と定義づけられる。この『学力低下論』は大学教育への危機感から始まり、徐々に小中学校教育を巻き込み、具体策の提言を求める批判や不安の声が高まった。併せて経済協力開発機構（OECD）による2003年学習到達度調査（PISA）によって、各国比較による高校1年生の教科別データが提示された（2003年毎日新聞）。それによると、従来1位グループにあった数学的活用力の明白な低下データが提示されたのである。さらに致命的なデータとしては各教科を横断して『読解力の低下』という深刻な結果が出たのである。成績はよくても勉強への関心の薄い生徒像や、生徒から信頼されていない学校教育像が明白になったのである。上記の研究機関の英文引用資料は、このような教育事情をさらに調査研究する目的で実施されたものである。（A research on daily life & consciousness of high school student; Japan, America, China & Korea, 財団法人 日本青少年研究所、2004年）。このような国際的・国内的教育事情を考慮しつつ、上記の研究機関の英文資料の分析結果に現代の教育環境を踏まえ、個人的な説明結果を付け加える。

高校生ともなると、日本、アメリカ、中国、韓国でも、男性と女性の関係だけでなく、学校での諸活動、人間関係、人生観など個人としてどのように考え行動するかが大きなウェイトを持っているようである。

図A-1 Mother Language は国語についての各国の自己評価の男女併せての結果である。「上・中の上」は日本、中国、韓国とも3割前後となっているが、アメリカでは4割強と、4カ国でトップのデータになっている。また「中」は日本を除く3カ国が5割強となっている。必然的に成績下位者に相当する「下」と答えた日本の学生は3割強を占めている。日本の下位に当たるデータは上記に述べたOECDの『読解力の低下』の結果と符合する。「推考する、調べる、想像する、まとめる、判断する、分析する」など創造的な思考力の低下が見られるのは、由々しき事態と認識しなければならない。

図A-2 Mathematicsについては、「中・下」と答えた学生が各国とも6割から7割強となっている。数学の苦手な学生がかなり多いことが読み取れる。しかし、日本の場合、「下」に当たると自覚している学生の比率が4割強を占めている結果を重大な案件として認識する必要がある。

図A-3 Foreign Languageについては、日本での成績下位者の比率が4割強になっている点に注目せねばならない。言語教育全般について、若者の劣等感ないしアレルギー反応がこのデータ分析から読み取れる。この結果に対する対応策を真剣に考えねばならない。また成績下位者

の中国と韓国との比率割合にも注目しなければならない。アジア三ヶ国内の成績不振者における言語習熟格差は、将来的に観れば、潜在的な経済格差と軋轢にもなりかねないデータになる。大学の語学教育において、早急なる「早期英語教育/導入教育/補習教育/リメデイアル教育」などの施策が必要となってくる。

図A - 4 All the Subjects on Averageについては、それぞれのお国柄が如実にデータとなって示されている。即ち、「上・中の上」については、4割強を示したアメリカを除き、アジアの3カ国について明確なる差異は見られない。しかし「中の下・下」については日本3割強、韓国2割5分、中国1割と差が見られた。アメリカではそのランクに相当すると自己診断した学生が0.14割とほとんど皆無に近かった。

全教科を平均した場合、日本人と韓国人の間ではまことによく似通ったデータが見られる。ただ、日本人の場合は、自己主張の無さ、自己の過小評価化、自己の成績のデータ化など、日本人特有の負の側面が見られるのである。私達は日本の学生実態を見聞して、これが実体なのか、または虚像なのかを分析しなければならない。

B. At school, when do you feel most satisfied and enjoy yourself?

| | Japan | America | China | Korea |
|------|-------|---------|-------|-------|
| B-1 | 29.7 | 78.5 | 72.3 | 38.1 |
| B-2 | 3.0 | 8.3 | 28.6 | 5.5 |
| B-3 | 77.3 | 88.4 | 67.9 | 56.5 |
| B-4 | 7.1 | 39.3 | 43.7 | 37.1 |
| B-5 | 31.5 | 81.6 | 70.1 | 71.1 |
| B-6 | 7.5 | 25.3 | 37.9 | 28.0 |
| B-7 | 37.5 | 64.2 | 61.6 | 38.8 |
| B-8 | 14.4 | 20.8 | 58.1 | 29.5 |
| B-9 | 3.9 | 5.4 | 9.2 | 2.2 |
| B-10 | 7.7 | 4.6 | 3.9 | 3.5 |

<分析の講評>

学校生活で最も充実しているのは「どのような時か?」を聞いている10項目である。

日本の学生は「親しい友人といるとき」が8割近くに達し、ほかの項目の中ではるかに多かった。学校生活の楽しみが友人関係に偏りすぎたデータとなっている。

アメリカは「親しい友人といるとき」が9割近くに達し、「よい成績をとったとき」とか「好きな授業を受けているとき」も8割前後と高い評価となっている。

中国は「好きな授業を受けているとき」「よい成績をとったとき」が最も高く7割前後となっている。さらに「親しい友人といるとき」「自分の個性や特技を生かせたとき」「学問の楽しさを発見したとき」などが、6割前後と高い評価を出している。

韓国は「よい成績をとったとき」が7割強でダントツである。それに続いて、「親しい友人といるとき」が6割弱となっている。日本の学生の10%未満のデータと比べた場合、韓国の学生

の優れている点は、「好きな授業を受けているとき」「先生に褒められたとき」「学問の楽しさを発見したとき」「勉強に打ち込んでいるとき」など3割前後をキープしているところである。韓国学生の学業に対する姿勢は注目に値する。絶えず、彼らはプラス思考でアグレッシブな生き方を求めている。これは隣国の最も優れた面であろう。

一般的な講評として眺めた場合、アメリカと中国は学校を「勉強の場所」として認識しており、学習の楽しみが「学校での充実感」と結びついている。両国にわずかの差で韓国が続いており、学校生活の充実感が「学校」をキーワードにして放射線状に広がりを見せ、健全な肯定曲線を描いている。日本の学生は学校を友人との「交流の場所」として捉えている傾向がみられ、学校の持つ学習現場からの逃避曲線となっている。無気力・無関心・無感動・無目的なる「無」勉強な若者像となっている。この日本の学生の傾向分析が今後の大学教育、ひいては教養教育さらには英語教育に課せられた責務となると考えている。

『学習条件の現状と分析』

大学改革は、「制度改革だけでなく、授業などの具体的な教育実践の改革を中心にすることから始めたい」（浅野、1994）とあるように、毎日関わっている授業の見直しから始めることが事案解決の一番の早道と考えられる。その前に、授業科目の前提となる学習条件について、教務課の応援を得て提出いただいた教学資料の分析と対策を試みる。その理由としては、あくまで前向きに、「よい授業を実践して学生に満足感を与えたい、そしてその可能性を追求したい」と念ずるからである。本学は2004年度から新カリキュラムが施行され、今年がその3年目に当たるわけである。そのカリキュラムのプラス面とマイナス面を、授業を遂行している現場からの声として分析を試みることは、とても意義深いものであると心得る。さらに来年度、文学部と社会学部の外国語科目取得単位が一樣に改革される節目の年度になることから、今後の外国語科目群の未来への展望を伺う意味からも意義深いと考える。

教養科目構成（2006年度、30単位）

* 2007年度から社会学部は文学部に準ずる単位構成となる。

| 科目区分 | 文学部 | 社会学部 |
|------------|------|------|
| 主題科目 | 16単位 | 16単位 |
| 外国語科目 | 10単位 | 6単位 |
| 健康スポーツ科目 | 2単位 | 2単位 |
| 上記のいずれかの科目 | 2単位 | 6単位 |

外国語科目構成「10単位必修」

| | | |
|------|---------|--------|
| 必修科目 | 英語 | 2科目4単位 |
| | 独・仏・中 | 2科目4単位 |
| | 英・独・仏・中 | 1科目2単位 |
| | 計 | 10単位 |

受講者割合（2006年度）

| | |
|---------|-----|
| 英語科目 | 51% |
| ドイツ語科目 | 12% |
| フランス語科目 | 7% |
| 中国語科目 | 30% |

1年次の外国語科目間の履修登録パターン

<文学部>

文学部の履修形態は、英語科目群と英語以外の外国語科目群とで若干の登録方法が異なっている。英語の場合は「 = 基礎、 = 標準、 = 応用」の習熟度別に体系化され、自己の到達能力を判断することによって自由に選択履修（4～6単位）することが可能になっている。その他の外国語は「 = 文法基礎、 = 発音基礎、 = 応用」の授業内容に分かれている。初めて習う外国語の性格上、 と を同時履修するように義務付けられている。

2005年度

| 英語 | 英語 | 外国 | 外国 | 国文 | 史学 | 地理 | 文化財 | 小計 |
|----|----|----|----|-------|-------|-------|-------|-------|
| 2 | 0 | 1 | 1 | 18.5% | 23.5% | 18.0% | 33.9% | 23.5% |
| 1 | 1 | 1 | 1 | 20.2 | 21.6 | 23.4 | 27.1 | 22.9 |
| 1 | 0 | 1 | 1 | 18.5 | 27.8 | 22.5 | 17.8 | 22.2 |
| 0 | 1 | 1 | 1 | 9.2 | 2.5 | 2.7 | 5.1 | 4.7 |
| 0 | 2 | 1 | 1 | 13.4 | 1.2 | 0.9 | 4.2 | 4.7 |
| 2 | 1 | 1 | 1 | 1.7 | 5.6 | 1.8 | 0.8 | 2.7 |

2006年度

| 英語 | 英語 | 外国 | 外国 | 国文 | 史学 | 地理 | 文化財 | 小計 |
|----|----|----|----|-------|-------|-------|-------|-------|
| 1 | 1 | 1 | 1 | 31.4% | 27.6% | 19.1% | 12.7% | 23.1% |
| 1 | 0 | 1 | 1 | 22.9 | 23.3 | 21.3 | 10.2 | 19.6 |
| 2 | 0 | 1 | 1 | 6.7 | 9.8 | 10.6 | 8.5 | 9.0 |
| 0 | 2 | 1 | 1 | 3.8 | 7.4 | - | 21.2 | 8.5 |
| 0 | 1 | 1 | 1 | 2.8 | 8.0 | 6.4 | 16.1 | 8.5 |
| 1 | 0 | 1 | 0 | 3.8 | 3.1 | 7.5 | 0.8 | 3.5 |
| 2 | 1 | 1 | 1 | 5.7 | 3.7 | 3.2 | 0.8 | 3.3 |
| 1 | 2 | 1 | 1 | 4.8 | 0.1 | 5.3 | 3.4 | 3.3 |

<分析の講評>

2005年度と2006年度のデータの差異は右端の小計欄の標示だけでは分かりにくいですが、各学科間を対比すれば、ある程度ご理解できるのではないかとと思われる。2005年度の場合、4月の入学期オリエンテーションでの教養科目の履修理念の周知徹底は、概ね教務課と各学科の説明に委ねられていたのである。その結果、教養科目（主題科目）と外国語科目の履修指導には十分な説明チャンスが与えられず、教養教育の根幹が御座なりにされる結果になった。2006年度の履修の場合は、昨年度に比較してみても充分とは言えないものの、教養の説明時間はともかく確保できた。その結果、国文と地理学科のデータ比較、文化財と史学科のデータ比較において、まことに興味深い資料結果がみられた。

< 社会学部 >

この学部は、選択必修6単位で、「英・独・仏・中」から6単位を修得することになる。文学部の場合と同様に、2005年度と2006年度によって履修登録のパターンがかなり異なっている。その理由は文学部で述べたとおりである。2006年度の履修では、学部の教育方針として、かなり積極的に語学の選択指導が実施されたのである。2007年度からは、文学部と同じ履修要件（10単位）になる予定である。

外国語教育の方針としては、初年次教育&導入教育制度の採択を考慮しており、その場合には、修得単位10単位の中での運用は不十分であることをここに明示しておきたい。

2005年度

| 英語 | 英語 | 外国 | 外国 | 人間関係 | 現代社会 | 小計 |
|----|----|----|----|-------|-------|-------|
| 0 | 0 | 1 | 1 | 32.4% | 24.5% | 28.5% |
| 2 | 0 | 0 | 0 | 15.7 | 15.9 | 15.4 |
| 1 | 1 | 0 | 0 | 13.9 | 4.7 | 9.3 |
| 1 | 0 | 0 | 0 | 5.6 | 8.5 | 7.0 |
| 1 | 0 | 1 | 0 | 5.6 | 6.6 | 6.1 |
| 1 | 0 | 1 | 1 | 3.7 | 7.5 | 5.6 |

2006年度

| 英語 | 英語 | 外国 | 外国 | 人間関係 | 現代社会 | 小計 |
|----|----|----|----|-------|-------|-------|
| 0 | 0 | 1 | 1 | 12.0% | 22.4% | 16.7% |
| 1 | 0 | 1 | 1 | 9.6 | 22.4 | 15.3 |
| 1 | 1 | 0 | 0 | 21.7 | 6.0 | 14.7 |
| 1 | 1 | 1 | 1 | 8.4 | 9.0 | 8.7 |
| 1 | 0 | 1 | 0 | 7.2 | 4.5 | 6.0 |

< 分析講評 >

2005年と2006年度を対照してみた場合、英語科目を履修しないパターンが1位を占めたこと、外国語の単位を1年次ですべて履修してしまうパターンになっていること、を踏まえ、数多くの「英語苦手・英語嫌い」の学生の自己表示を読み取ることができる。ただ人間関係学部のデータには、明らかに昨年度違ったプラス傾向が見られる。学部の特性として、就職活動に最も直結していることを、そのためには英語の履修が最も利便性が高いことなどを、今後の履修指導&学習活動の中で理解させて行かねばならないと考えている。

2006年度の開講科目数に対する英語科目の受講者割合

| 開講科目数に対する受講者数割合（％） | | | | | |
|--------------------|----|-------|----|-----|---|
| 英語 | 27 | TOEIC | 8 | 英会話 | 8 |
| 英語 | 26 | TOEIC | 10 | 英会話 | 8 |
| 英語 | 6 | TOEIC | 4 | 英会話 | 4 |

これは上記の「受講者割合」の項の英語（51%）の詳細な分析データである。これらの資料結果をベースにして、2007年度のカリキュラム再構築（社会学部と文学部の融合によるカリキュラム考察）を早急に取り組みねばならないのである。具体的には、外国科目群のガイドラインの再設定である。文学部内の学科構成（国文・史学・地理・文化財）と社会学部「人間関係・現代社会」の学科特性と併せ、学際的な世界遺産学科（2008年度開設予定）を複合的に考えねばならない学内事情を迎えている。外国科目群を学内のどのような位置付けに置くかが目下の最大の課題である。英語を専門科目と連携させて、「専門教育との相乗効果を狙い、アジアを重視した国際教育の向上」（米澤、2005）という目標を設定し、語学学習の重要性を学内に衆知せしめ、そして大学教育の根幹に位置づけられたらと意欲に燃えている。さらに「学部教育と英語教育とのコラボレーションアプローチ」を早急に検討する時期を迎えているのであり、緊急課題を設定して早速に取り組みねばならないと考えている。

『本学にとっての教養英語とは～良い授業を求めて』

「なぜ英語を学ぶのか？」という問いに、私の実施した調査では、「必修単位取得のため」「就職のため」「ほかの外国語より役に立ちそうだから」との答えが7割を占めている。この調査は4月の時点での1回生対象の調査結果であるが、これらは消極的なデータと考えられる。それに引き換え、積極的なデータと考えるものとして、「文化交流のため」とか「英語表現を通じてもっと専門知識を知りたいから」などは2割に満たない結果となっている。本学は他大学に比べ、「特色のある学部・学科」、「奈良という立地条件」と「教養部」という3本柱の特徴を有する大学であることを念頭に置いて、本学独自の教育カリキュラムを再構築するため、もっと綿密なデータ分析と推移結果を考察しなければならないと考えている。

つぎに私の授業に対する学生の講評（宇佐美 寛、2003）を利用して、今後の授業改善に一石を投じたいと思う。（7月の前期最終時のアンケート調査からの引用）

4月の学習調査と対比してみると、私の意図する学習目的に僅かに近づいた手応えを感じている。

- 「一般常識」＝英語だけでなく一般常識も教えてもらうのが良かった。
- 「豆知識」＝ただ英語だけでなく、先生から繰り出される豆知識が好きでした。
- 「日本文化・四季にまつわる話・日本人」＝日本文化や四季にまつわる話（立夏とか土用など）をしてくれたので日本人として知っておきたかったことを知れて良かった。
- 「人間の本質」＝英語と人間の本質というものを、英語を通して学ぶことができ貴重な体験になりました。
- 「先生と触れ合う機会」＝この授業はほかの授業と違って先生と触れ合う機会も多く、そのつど質問とか相談ができて良かった。
- 「目配り・人間性」＝この授業は先生がきちんとみんなに目を配らせてくれたし、とても良い環境で学べたと思います。色んな人たちの発表も聞けて、みんなの人間性も見えました。これからも部活とともにこの授業も両立して、これまで以上に頑張っていこうと思います。

- 「視座・英語の窓」=いろいろな視座を養うことができてためになった。英語という窓から社会を見つみると、普段とは違ったことが見えてくるが多く、とても興味深かった。また英語だけでなく、人生について学べた。
- 「物事を知る媒介」=英語を通じていろんなことが学べて面白いです。苦手な英語も物事を知る媒介にすれば楽しいものだと知りました。
- 「表現力・感性」=この授業は英語力よりも表現力を重視しているのがすばらしいと思う。さらに先生は一人ひとりの感性を大切にしてくれているので嬉しかった。
- 「読解力と考え方」=先生の授業は英語による読解力や考え方を試されたのだと思う。
- 「トータルの視野」=英語言うことはいうまでもなく、世間に対してトータルの視野を持つことに向けて、知識や考え方を深めることができました。
- 「英語で、日本語で」=英語の授業なのに“英語で、日本語で”考える場合が多く、今までにない授業だったので興味深かった。
- 「専門分野・世界遺産など」=この講座では英語の関りつつ、世界遺産とか看護とか心理とかの各学科の専門分野の題材を教材に随時取り入れてくれて実に楽しい。
- 「視点・班発表」=今まで英語嫌いだったけど好きになりました。また班を作り、みんなで協力して発表することで友達も増え、普段と違った視点で英語を見て楽しいです。
- 「レジュメ・発表」=この授業は自分たちでレジュメを作り、発表への工夫について考えることができました。
- 「グループ発表・チームワーク」=グループ発表という授業は中学校以来だったので、何度も集まり、チームワークが強まり、すごく楽しいです。
- 「発表原稿・自分なりの意見」=発表原稿を前向きにみんなで検討しながら作成できた。質問できなかったが、質問されたことについて自分なりの意見を述べることができた。
- 「プレゼン」=授業はプレゼンとかあって大変だけど、将来とても役に立つ内容だと思う。
- 「oral, visual & physical aspect」=今後はOral, Visual & Physical aspectのスタイルを大事にして社会で生かしてゆきたい。
- 「Eye Contact」=発表するのが緊張した。ちょっとEye Contactができなかった。
- 「イメージ・現代の課題・新聞」=高校時代の英語とあまりにも違って驚きました。単語1つからイメージを働かせて、現代の問題やニュースにまで行き着いてしまうところに、面白さを感じた。この授業で自分があまりにも物事をしらなすぎていると実感できたので、これからはもっと新聞を読もうと思う。
- 「大学の英語・嫌悪の改善」=僕にとって先生の授業はまさに“大学の英語”でした。今まで文法や単語を頭に詰め込む英語しか知らず、いつのまにか嫌いになっていた。先生は英語への嫌悪を改善させてくれました。
- 「自分の糧・予習」=この授業はやみくもに“詰め込み型”の授業よりも、自分自身で意欲も湧いて、高校以上に進んで予習するようになった。非常に面白く、自分の糧になった。

< 上記の学生評価から生まれる総括 >

英語は国際化が浸透した現代社会で使用する言葉であるが、大事なのは話す中身であり、英語はそれを盛る器に過ぎないことを理解することである。

英語は2つに分けて考えるべきである。1つは母語とする英米人の私有財産である英語（標準英語）の存在である。もう1つは世界すべての人の共有財産としての英語（国際英語）の存在である。この国際英語（共通英語）は完璧な修得でなくても良いというのが共通認識である。さらにこの共通英語には、さまざまな英語（方言：地域語・階級語・職場語）とスラング（俗語）などの存在があることを認識しなければならない。

言葉を複数履修することによって、物事を客観的に理解する思考形態が可能になる。日本語力を高めることによって英語力も鍛えられ、相乗効果が期待できる。言葉の複数履修の効果は、要するに想像力&創造力の育成に寄与し、複眼的視野の修得にも効果の発揮を期待できる。

英語や日本語などの言語には、「伝達の道具」という性格のほかに、「思考の道具」という性格がある。人間は言葉を使うことができるから、物の道理を考えることが可能となる。言葉が存在しなかったら、思考はありえない。「伝達の道具」の分野に光を当てすぎて、「思考の道具」としての英語を、あまりにも重要視してこなかったのが現代の日本の言語政策であり、言語観であると私は思える。ネゴシエーション（主張・交渉）の根幹には「思考の道具」があることを改めて実感させられる。

外交・交渉の場面では、自国の言葉で話すのが基本であり、英語力以前のコンテンツによって勝負がつくのである。最近の日本政府の対アジア外交で、絶えず受身的立場に置かれやすいのも、「思考の道具」という概念軽視がその根幹にあるものと思われる。闘い（=会議）の前から、思考（=気）力で後塵を拝してきたきらいがある。

『FD. 授業計画案例』

授業学研究委員会の開発した「授業実践フォーマット」(高橋、2006)を利用して、私の授業について詳細に記載したものを発表し、授業改善のための自己点検を試みる。

| | | | | | |
|-------|--|------------------|--------|----------|--------------------------------|
| 指導者 | 山田隆敏 | Takatoshi Yamada | | 専門分野 | 英語言語学 |
| 授業科目名 | 英語 (三) | 使用言語 | 日本語・英語 | key word | Critical thinking presentation |
| 副題 | 読解・発表力 | レベル | 英検準2級 | | |
| 科目目標 | 語学の共通目標「聞く、話す、読む、書く」分野の総合的なレベルを図る。それに加えて、多様で内容豊かな教材を使用する。基礎学力のあるものはこのクラスからの履修を薦める。 | | | | |
| 授業の特色 | 授業にグループ発表を取り上げ、授業の根幹にすえる。この指導法は、「グループ内の人間関係を重視し、自立と協力関係を促す」との観点に立ち、自発的で、独創的で、相互扶助のグループ発表の特色を出した学習形態を目指す。発表からもれたグループには "Mutual Evaluation Card"によって客観的な評価と質疑応答のチャンスを与える。CALL教室を利用しての授業の利点を生かし、多様な実践活動を行う。 | | | | |

| | | | | |
|------------------------|--|---|----------|----|
| 学生の特徴 | <p>概ね、学生たちは意欲的であるが、英語苦手な学生が若干名いる。多様な入試形態によって、英語力には若干のばらつきが見られる。男女比は男子7.5で、女子は2.5の割合である。</p> <p>この授業の履修条件は、つぎの4項目に分かれる。</p> <p>講義要綱を読んで選択した～ 53.8%</p> <p>昨年の授業に引き続き選択した～ 7.7%</p> <p>クラブ・先輩の紹介で選択した～ 12.8%</p> <p>時間割がうまくあったから選択した～ 25.6%</p> <p>学科割合：国文12.5%、史学22.5%、地理35.0% 文化財22.5%、人間7.5%、現代5.0%</p> <p>学年割合：1年次55.0% 2年次以上45.0%</p> <p>前期試験の平均点：64.3点</p> | | | |
| 授業条件及び形態等 | 実践校 | 奈良大学 | | |
| | Class人数：42人 | 開講期間：通年 | 必修・選択の別 | 必修 |
| | | 受講対象：1年～4年 | | |
| | 単位数(年間)：2 | 開講学年：1年 | 授業形態：演習型 | |
| | 使用教材 | Everyday Psychology, 2005, NAN'UNDO | | |
| 使用機器 | Casset/CD | 教室形態 | CALL教室 | |
| 評価 | <p>平常点15%(+挨拶+笑顔-遅刻-低い声-姿勢-読みにくい筆順)</p> <p>発表点・質疑応答30% レポート15% 定期試験 40%</p> | | | |
| 備考 | <p>グループ発表は2以上4人以内を、席順によって構成する。</p> <p>発表原稿(レジュメ)はワープロ作成とし、プレゼンのノウハウを指導。題材は使用テキストとするが、必ずしもそれに拘らないことにした。テキストはあくまで材料であり、授業の都度、多様な教材を採用。CALL教室利用の利便性を生かし、up-to-dateな資料をインターネットで学生に提示して、意見とか感想を述べさせる。</p> <p>自主教材ソフトALSIによって、TOEICのリスニングの向上を目指す。</p> | | | |
| 具体的な指導の実践例(13回中7回、90分) | | | | |
| 授業の展開(教師の指導、学生の活動) | | | | |
| 時間(分) | 教師の指導 | 学生の活動 | | |
| 0～10 | 座席表で出欠の確認。直近の話題について学生と質疑応答。 | 話題性について発表準備。 | | |
| 10～30 | 今日の発表のセクションについて、質疑応答に備えての机間巡視を行い、学生の予習状態の確認と質問に答える。 | 発表グループにプレゼン器具の用意をさせて最終チェック。クリティカル・シンキングの面からの発表を用意させる。 | | |
| 30～70 | 発表グループは2グループを原則とし、事前に出されたレジュメのチェック部分がうまく消化されているかをチェックする。絶えず机間巡視を行う。そして発表後の質問を促す。 | 発表グループはパワーポイント、フリップチャート、OHC&OHP、または対象物などを提示して、与えられた10分以内の発表を要領よく仕上げる。学生はEvaluation Cardによって、評価と質問を行う。 | | |
| 70～80 | CALL機器を用いて、今日の英文を聞いて、リスニングリサーチを実施する。 | キーワードを聴き落とさないよう、また、その意味が答えられるかなど、学生の予習と学習の程度が試される。 | | |
| 80～90 | 授業の纏めとして、各グループと学生に対する注意点も含め講評を行う。 | 学生は次の発表グループの連絡を受け、各自の分担を再確認。 | | |

省 察

グループ発表には平均40分弱を当てている。他グループの真似をしないことが申し合わせとなっている。グループ発表は絶えず変えながら実施する。

アンケート結果： 友人の考え方と着眼点がよくわかる。
中高時代とは違った手法なので面白い。
予習をせざるを得なくなる。

仲の良いグループとは限らないので、苦しい面がある。

グループ発表を行うには、教師の負担は大きく負担はかなりのものである。プレゼンのための機器の点検と準備など、事前の作業量は教師にかかってくる。語学は「演習科目であって、演習科目にあらず」であると学内では位置づけられている。だから助手とか事務職等の配置はなく、レジュメの印刷も教師負担である。しかし、学生の生き生きとした積極的対応と雰囲気に触れれば、「授業とは格も楽しき哉」となる。望むべきは語学教育の効果を最大限生かすために、現状の40～50人クラス体制から、30人体制の確保が可能になればと願っている。

* Critical Thinkingのスキル上の位置づけ

学生たちに下記の四項目を指導する際に、私が強調するのは「imagination & inspirationの感覚」の養成である。この二つの感覚は、特に今の若者から欠落してしまっていて発想困難な感覚である。さらに小・中・高校段階の教育システムでも育成されない感覚である。この感覚と発想のトレーニングは、激動のIT国際社会の中で、言語教育上で必須のイメージトレーニングメソッドである。

Listening : 相手の話を分析し、広い視野からみて対比的な意見を構築する。
Reading : いろいろな情報を総括的に捉え、今昔のものを対比的に読み込む。
Speaking : 相手の話を理解しつつ、説得力のある会話を継続する。
Writing : 独自性、創造性で、時代感覚に富んだ文章を書く。

* 語学教育の外部評価（TOEIC・IPテスト結果から）

2004年4月の大学カリキュラム改革によって、外国語科目は「 Semester制」から「通年制」に変更になった。FD（授業評価）の観点と、語学教育の伸長度合いの両面で、学内にTOEIC・IPテストを導入することによって、語学教育の教育成果を確認することになった。その結果、平均点と最高点ともに改善傾向が見られる。

| | | | | |
|-------|-----|------|-----|--------|
| 2004年 | 平均点 | 780点 | 最高点 | 388.7点 |
| 2005年 | 平均点 | 520点 | 最高点 | 426.8点 |
| 2006年 | 平均点 | 825点 | 最高点 | 439.3点 |

『学生による授業評価』

授業改善には、学生による授業評価は欠かせない。次の評価表は本学で全学的に実施されたもので、上記の授業計画案（木野、2005）のクラスのものである。

| | |
|------------------------|-----|
| この授業への出席率はどのくらいですか | 4.9 |
| この授業の予習復習は週当たりどのくらいですか | 3.2 |
| この授業内容は理解できましたか | 3.9 |
| 授業内容はシラバスに沿っていましたか | 3.8 |
| 教員は熱意を持っていましたか | 4.4 |
| 授業内容はよく準備されていましたが | 3.9 |
| 授業内容は量的に適切でしたか | 4.2 |
| 教員の話し方はわかりやすかったですか | 3.9 |
| この授業は総合的に見て満足できるものでしたか | 3.8 |
| グループ発表は満足できるものでしたか | 4.2 |

(注) 5：非常に当てはまる 4：やや当てはまる 3：どちらともいえない
2：あまり当てはまらない 1：まったく当てはまらない

結果講評を自分なりに考察すれば、平均以上のものもあるが、まだまだ自己反省せねばならない項目が多すぎると思っている。改善すべき余地が多々あり、後期の授業に向けて課題が明白になった。

最後にこのクラスのものも含め、前期テストの採点内容を公表し叱正を仰ぎたい。このテストの目的は、テキストとか授業内容の理解度確認には留まらない。学生の発想豊かな視点の確認、すなわちcritical thinkingの確認に焦点を置いたわけである。学生も承知のことであるが、テストの素点は40%（40点）である。私の独自の評価方法では、平常の授業活動内容そのものが、評価の大部分（60%）を占めることを意味しているのである。

『終わりに』

理想の授業確立に向けて、日々研鑽に励んでいるが、授業の行く手には学生という若々しい青山あり、理想とする授業をいつも心に描いて試行錯誤しているのが毎日の実情である。授業ほど楽しいものはなく、学生の授業評価を真摯に受け止め、準備と改善と客観的な視野を忘れずに、再チャレンジを行うつもりである。

『参考・引用文献』

- 1) 日本経済新聞「『総合知』構築と東大の責務」、2006年9月4日
- 2) 実松克義ほか「広げる知の世界」(ひつじ書房、2005) pp.2 - 14
- 3) 朝日新聞「学力問題と経済の主な歴史」、2002年7月22日
- 4) 毎日新聞「OECD学習到達度調査」、2003年4月
- 5) 日本青少年研究所「高校生の生活と意識に関する調査」、2004年
- 6) 米澤彰純「国際化教育の舞台裏」(Between, 12 - 1月号) 2005年
- 7) 宇佐美 寛「大学の授業」(東進堂、2003年) pp.139 ~ 163
- 8) 高橋寿夫「授業研究 『授業』改善のための自己改革から理想とする授業へ」(Neo-Anglica, 第4号、2006)
- 9) 大学教育学会「新しい教養教育を目指して」(東進堂、2004年)
- 10) 木野 茂「大学授業改善の手引き」(ナカニシア出版、2005年) pp.27 - 29
- 11) 大学教育学会「先進諸国の外国語教育：日本の外国語教育への示唆」(JACET関西支部、2003年)
- 12) 田中慎也「どこへ行く？大学の英語教育」(三修社、1994年)
- 13) 大学コンソーシアム京都「2001年度・第7回 FD フォーラム報告集」
- 14) LET Association「Number 41, Language & Technology, 2004」
- 15) JACET「21世紀に向けての英語教育」(大修館、1993)
- 16) 絹川正吉「ICUのすべて」(東進堂、2002)
- 17) 大学教育学会「第27回大会 発表要旨集録」(大学教育学会、2005年)
- 18) 京都大学高等教育教授システム開発センター「第2回 大学教育研究集会/ 第9回 大学教育改革フォーラム」(京都大学、2003年)
- 19) 同志社大学言語文化研究センター「明日の外国教育に向かって」(同志社大学、2004年)

- 20) Mayer, R.E. (1997), *Multimedia Learning: Are we asking the right questions?* (*Educational Psychologist*, 32(1), 1-19.
- 21) Nation, I. S. P. (2001). *Learning Vocabulary in Another Language*. Cambridge: (Cambridge University Press)
- 22) Day, R. R. & Bamford, J. (1998). *Extensive reading in the second language classroom*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 23) Just, M. A. and Carpenter, P. A. (1980). A theory of reading: From eye fixations to comprehension. *Psychological Review*, 87, 329-354
- 24) Nuttall, C. (1996). *Teaching reading skills in a foreign language* (2nd ed) Oxford: Heinemann.
- 25) Skehan, P. (1998) *A cognitive Approach to language Learning*. Oxford: Oxford University Press

Summary

In this paper, we should consider our teaching plan in class from various angles or in all its aspects, and debate how we make all sorts of attempt to approach the realization of "ideal education". We should make up the best teaching plan to practice and develop skills to improve students' listening, speaking, writing and reading ability. Students taking our courses can therefore learn about other countries directly from other young people through TV or Internet. Our students should be also encouraged to make cultural comparisons between each country and Japan as well as to discuss or debate their own ideas and opinions on each issue.

885

TOEIC I (金2)

Student ID()Name()

1. つぎの英文の () 内に適語を入れ、さらに設問に答えよ。

The Purple Priority Seats are (1) for elderly and disabled (2), as well as expecting mothers and passengers with small children. Passengers standing near the Priority Seats are (3) to (4) turn off their (5), as these may interfere with pacemakers.

- (1) reserved (2) passengers (3) requested (4) please (5) cell phones

設問 = Priority Seats に対する認識と対応: 優先座席は高齢者や身体障害者その他に

妊婦や小さな子どもを連れている人に優先座席の近く

Q: What should passenger who are standing near the Priority Seats do? に立っ人は携帯電話を切ることを要求

A: They should (switch) off their (mobile) phones. 切る。

*上記のカッコ内の書き出しで始まる語句を答えよ。

As you can see, the condo has been completely (1). All the rooms have been (2) painted, there's new wall-to-wall (3) throughout, and the kitchen has new (4) and appliances, including a heavy-duty dishwasher and (5) compactor. And just look at that beautiful view!

- (1) remodeled (2) freshly (3) carpet (4) cupboards (5) garbage

設問 = 分譲マンション(Condo)の部屋の概要と今の住生活への展望。

部屋は新鮮な色で塗られ、床一面に丁寧に新しいカーペットが敷かれ、台所には新しい食器棚と

器具、丈夫な皿洗い器やゴミ圧縮器が置かれた。

今の住生活は便利で素晴らしいものだと感じている。

2. つぎの英文の①~④の空白部に最も適切な英語を書き入れよ。そして設問に答えよ。

Hi, everyone. I'm Bob, and this is my wife, Doris. A few years ago, (① like so many other city dwellers

), we decided to "downshift" and move out to the countryside. That's

right, we gave up the fast-paced, hectic, "rat race" life of London and opted for the quieter, simpler lifestyle of rural England. And not once have we regretted our decision. (② Sure, it has not always been easy). We were soft and spoiled when we first moved. (③ We missed old friends and attractions). We've had to pick up new living skills and learn to get along on far less money. But it's been worth it.

We're happier, healthier, and, we like to think, better people for it. And now we've written a book, Bob and Doris's Adventures in Yorkshire, that tells you how you, too,

(④ can downshift to better of life).

↑ way

設問 = ① "downshift" に象徴されるように、イギリスの暮らしを日本の今と比較して説明

せよ。downshift後のイギリスの暮らしは静かで、単純でんびりとした感じだか

日本は忙しなかにせよ、時間の流れが速く、複雑である。

② "downshift"後の生活の実態、メリットとデメリット面を述べてみよう。

メリットは 少ないお金で生活する術を身につけ、健康的になること。

デメリットは 古い友人を失い、また都市での刺激的な生活をあきらめることか

③ "downshift" の最大の価値とはなんだろう。できること。

何かに、健康的になり、少ないお金でやってける新しい生活の技を

身につけることか、でき心が豊かにしてゆとりをもつことか、できるということ。

3. 会話文を読み、() 内に適語を入れ、Questions-Answers に答えよ。その答えが正しくない場合は、訂正せよ。

M: I'm afraid you (found) the play boring.

W: Not (exactly) boring, but it was a little over (my) head.

M: Well, (next) time, we'll see something you want to see.

I know you like musicals.

W: There's no need (you to) apologize, William. I've had a very nice evening. I'll see you at office (on) Monday.

* * * * *

(1) Where have the man and woman just been? To

They have just been < playing tennis >.... (in the theater)

(2) How did the woman find the play?

They found it very < easy >.... (a little difficult)

4. () の英語は文法的に正しくありません。正しい表現に書き直しなさい。

1) Jenny has (none) excuse for being late today.

2) I'm afraid I have (often) been to Atlanta.

3) (As) the traffic was very congested, I reached the office on time.

4) It is true that cars are convenient, (and) they are dangerous, too.

5) Would you please show Apartment 5 (of) that young couple over there?

6) You should finish your report before your boss (will get) back from L.A.

7) We can't take a paid vacation unless we (worked) here for at least a year.

* * * * *

1) no 2) never 3) Although 4) but

5) to 6) gets 7) will have worked

++講座評価と要望&反省など

受験が終わって単語を忘れていたのだ

勉強しなさいといわれたいと思いた。

Reading -Material Research (Fri.2)

Student ID()Name()

5. つぎの世界遺産の英文を読み、設問に答えよ。

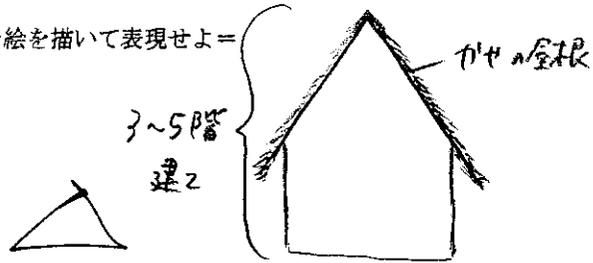
Located in the terraced valley of the Sho River, the villages of Shirakawa-go and Gokayama are composed mostly of traditional gassho-zukuri style farmhouses that are unique to the region. The term gassho-zukuri, meaning literally praying hands, comes from the shape of the farmhouse roof which resembles two hands clasped in Buddhist prayer. The gassho-zukuri style of traditional Japanese architecture was first brought to the attention of the outside world in 1939 by the German architect Bruno Taut in his book, *Rediscovery Japanese Beauty*.

1) terraced valley の情景を説明せよ = 段々畑、山腹の傾斜地に作る田舎

2) terraced を使って、(棚田、千枚田) の英語表現は? = terraced paddy field

3) Shirakawa-go & Gokayama は世界遺産のどの分野に属するか = 文化遺産 △

4) Gassho-zukuri を絵を描いて表現せよ =



5) Gassho-zukuri style の住生活は、現代の生活に比べてどういう利点と、現代では欠落している価値観を体現しているかを説明せよ。

* 利点: くまなどが使われておらず、かまの屋根は自然的で

夏の暑さを和らげ、中を涼くする。昔の人の知恵が使われており、自然環境が大切に保存されている点。

** 価値観:

合掌造りの住生活ではカマを飼ったり火薬の製造に多く手間がかかったため大家族で共同生活をしていた。またかまの屋根やくまを使わないなど自然環境も保存されている。

85

英語・II
Student ID()Name()

1. 効果的な演説(Effective Presentation)は、これからの人生にとって、就職活動をあと数年後に控える君たちにとって、さらに、普段、英語ではなくて日本語しか使わない若者にとっても、自分の気持ちをストレートに話すために、とても大事な自己表現手段である。このプレゼンの手法を身に就ければ、今のアジア経済社会の人々、特に、中国人と韓国人らと対等に議論を交わされる。口舌泡を飛ばして、相手を説き伏せられる。

さて、つぎのそれぞれ4つのエッセンスに相当するスピーチ手法の内容説明にあった表現を、文末の()内に、最も適する英語で答えよ。

Oral Aspect: 話す相手が聞き取りやすい自然で滑らかな口調で話す (fluently)
話す相手に、こちらの意図が届く適度な声で話す (volume)
話す相手が聞き取れるような、はっきりした口調で話す (clearly)

Physical Aspect: 話す相手の目を見て、相手に訴えるように話す (eye contact)
話す相手に見てもらって心地よい姿勢で話す (posture)
話す相手を惹きつけ飽きさせない身振りをつけて話す (gesture)

Visual Aspect: 話す相手にハンドアウトとか視聴覚機器を使って視覚に訴えて理解を深めるよう話す (visual aid)

Organization Aspect: これはスピーチ内容の構成要素のことです。日本語で起承転結に相当する大切な要素です。

起 (introduction) 承・転 (body) 結 (conclusion)

2. 素晴らしいプレゼンを行う際の留意すべき基本は、アイコンタクトであり、ボディランゲージ (ジェスチャー) であり、そして姿勢 (すがた) である。そのつぎに必要とされるのがスピーチの原稿の構成である。その構成には6パターン (Greeting/ Introduction / Emphasis / Chronological order / Concluding remarks / Endings) が必要である。つぎの英文を上記の6パターンに大別せよ。英文の最初と最後の3 Wordsを明記せよ。

My Hometown

Good morning, everybody. Today, I'm going to introduce my hometown, Kyoto. It has two major characteristics, traditional and modern. First, there are a lot of old temples and shrines built in the past. If you visit Kyoto city you'll find various quiet sightseeing spots, including some classical Japanese style gardens. Second, you must remember Kyoto has another side. Once you reach the areas around Shijo Kawaramachi, you can enjoy yourself at interesting places such as pubs, karaoke bars and shopping malls. I love my hometown, Kyoto, so I hope all

of you will find it interesting as well. Thank you for your attention.

Greeting : Good morning, everybody.
Introduction : Today, I'm going to ~ my hometown, Kyoto.
Emphasis : It has two ~ traditional and modern.
Chronological order : First, there are ~ and shopping.
Concluding remarks : I love my ~ interesting as well.
Endings : Thank you for your attention.

3. 次の英文表現にあった Presentation Media を、文末の()内に記号で入れよ。

- (1) It is by far the most flexible medium. Various forms of information such as data, text, graphics, video and audio are linked together in this media. (d)
- (2) Good for writing simple message and background information. (b)
- (3) Useful for showing summaries, list of reference, full notes on the presentation. (e)

a) Blackboard b) Flip Chart c) OHP d) Hypermedia e) Handout

4. 主人公の大学入学前後の生活、特に食生活についての変貌ぶりを、心身面と健康面から考えて、箇条書きで文脈に沿って要約せよ。

Ladies and gentlemen, today I'd like to tell you about the diet of a university student in Oxford, England. Michael Stephen, a 19 year-old student, has started to live in the hall where the students eat and study as well. He used to eat a healthy diet before he came to the college, such as muesli for breakfast and chicken salad for lunch. But now for breakfast he eats two eggs, three sausages, bacon, four pieces of toast with butter and strawberry jam, and all this after a large bowl of porridge. He is doing this because this way he can avoid spending any money on lunch. At his university, breakfast is part of the fixed charge that he pays the college for accommodation.

- * 大学に入る前は、健康的な食事をとっていた。
- ** 朝食にミューズリー、昼食にチキンサラダを食べていた。
- *** 今は、朝食に2つの卵、3つのソーゼージとベーコン、4枚のバターとイチゴジャムをぬった
- **** トーストを食べて、その後にはポリッジを食べる。
- ***** このようにして、昼食で、できる限りお金を使うのを避けている。

5. つぎの英文を Visual Aids を用いて、効果的な学習方法を考案せよ。各種 Visual Aid ごとに、英文の最初と最後の3文字で明示せよ。(2)(3)は要約せよ。

(1) Let's make guacamole today. Guacamole is a popular Mexican dish. It's mashed avocado served as a dip or filling. We need two medium ripe avocados, one tablespoon lemon juice, two medium tomatoes and one cup of finely chopped onions, one teaspoon salt, and 1/4 teaspoon of pepper. First, peel the tomatoes and chop them finely. Then, mash the peeled avocados with a fork. Add the lemon juice and blend. Add the remaining ingredients and combine thoroughly. Serve with chips.

*bullet chart: It's mashed avocado ~ Serve with chips.

**flow chart:

***イラスト: It's mashed avocado ~ Serve with chips.

****写真: Guacamole is a popular Mexican dish.

(2) Giant pandas live in a few mountain ranges in central China, in Sichuan, Shaanxi, and Gansu provinces. They once lived in lowland areas, but farming, forest clearing, and other development now restrict giant pandas to the mountains.

ジャイアントパンダは中国の中央の山間部に住んでいる。彼らはかつて、低地に住んでいたが、農場や森林伐採やその他の開発で、今、山に住むジャイアントパンダを制限している。

(3) Giant pandas live in broadleaf and coniferous forests with a dense understory of bamboo, at elevations between 5,000 and 10,000 feet.

Torrential rains or dense mist throughout the year characterizes these forests, often shrouded in heavy clouds.

ジャイアントパンダは海拔5000~10000フィートの竹がある、広葉樹林や針葉樹林帯に住んでいる。豪雨や濃霧が特色で、重い雲が覆う。その森は

6. Hunter-Gatherers の発表は、複眼的視点として、またプレゼンの Volume として、今後に見るべきものがあると考えられる。どういう観点か英語で表現せよ。

①複眼的視点 まず、マンモスにしろった詳しい資料を提示して、そこから、層位学や考古学的視点まで視野を広げて、幅広くプレゼンされていた点、参考になるところだと思う。ハンドアウトのまとめ方が良かった。

②Oral Aspect "volume"としての観点: 聞きとりやすい声で、聞き手をあまさせない。ように話すべきだと思う。

+ 講座評価、要望 & 反省

授業はプレゼンとかあって、大変だけど、将来、とても役に立つ内容だと思う。もっと、良いプレゼンができるようにしていきたい。